

## 〈原著論文〉

## 「当事者」とは誰のことなのか？

—第7回島根スタタリングフォーラムに参加して—

原田 大介

本研究では、「第7回島根スタタリングフォーラム」を考察する。吃音についての話し合いから私たちが学ぶべきことは多い。本研究では、特に「痛み」という現象に着目する。フォーラムでおこなわれた子どもたちとの話し合いを通して、「痛み」の概念の理論的な視座を提示したい。「子ども」「母親」「囚人」というそれぞれの「痛み」の概念を深めるだけでなく、「囚人」の「痛み」を感じることを現代的意義として取り上げたことが、本研究の最大の収穫である。

キーワード：痛み、子ども、母親、囚人、当事者

## 1. はじめに

吃音の問題は、吃音をもつ者だけの問題ではない。未だ吃音という現象の存在すら知らない人も含め、吃音にかかわるすべての人の問題である。

吃音の話し合いの場は、私たちに様々なことを教えてくれる。第7回島根スタタリングフォーラムも、そのひとつの場として位置づけることができるだろう。印象的だったのは、フォーラムの参加者の多くが、吃音を吃音という現象だけの問題として捉えていない点にある。大人だけでなく、子どもたち自身も、吃音という現象を、私たち一人ひとりの「痛み」に置き換えて考える傾向があった。

「痛み」とは何か。それは、私たち一人ひとりがこれまでにかかわってきた（かかわらざるをえなかった）、思わず目を背けたくなるような「生きづらさ」や「生き苦しさ」のことをあらわす。吃音について考えることは、「生きづらさ」や「生き苦しさ」について考えることにつながる。そして、その思考の過程は、「私」の「痛み」や「あなた」の「痛み」について考える姿勢や態度を培う役割を果たしていたのである。

そこで培われた姿勢や態度は、やがて、「私」の「痛み」を和らげるような「ことば」を生みだすようになる（「私」から「私」へ）。また、その姿勢や態度は、「痛み」に打ちひしがれている「あなた」に投げかける「ことば」を生みだすようにもなる（「私」から「あなた」へ）。

このような学習の場を「痛みについて考える場」や

「ことばが生まれる場」として捉え直した場合、「障害児教育」や「普通教育」などの枠だけに限定して扱うべき問題ではないことがわかる。人の「痛み」について、無視・無関心を決め込む傾向がある現代の子どもや若者には（そして私たち大人も）、あらためて、「痛み」とは何かについて考えることができるような学習の場が必要である。

本稿では、いわゆる「普通教育」と位置づけられている国語教育（ことばの教育）の場を想定し、新たな国語教育の場を構築するための手がかりを得たいと考えている。その上で、第7回島根スタタリングフォーラムでのやりとりの考察をすすめていきたい。さらに、本稿では、「痛み」という現象についての理論的な視座を提示したい。「痛み」という現象をどのように引き受けるかは、今後、「痛み」について考える、あらゆる学習の場を設定するうえで必要だからである。特に、本稿で提示した「囚人」という概念は、国語教育という制度的な場に参加する子どもたちに限らず、私たち一人ひとりの普段の姿勢や態度について捉え直す契機を生みだすだろう。

## 2. 島根スタタリングフォーラムの歴史

「島根スタタリングフォーラム」は、「島根スタタリングフォーラム実行委員会」によって運営されている。フォーラムのメンバーは、宇野正一（41）を中心とする小学校教員や中学校教員であり、その多くが「ことばの教室」や「通級」の教員である。加えて、フォーラムのメンバーには伊藤伸二（61）がいる。伊藤は日

\* 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期学習開発専攻

本吃音臨床研究会の会長であり、国際吃音者連盟の顧問理事でもある。宇野と伊藤は第一回目のフォーラムから参加している。これまでの6回のフォーラムについて、宇野（2005）は次のようにまとめている。

	期日	会場	人数	備考
1	1999/5/22～23	国立三瓶青年の家	88	記念すべき第1回。伊藤氏の初恋の人見つかる。県親の会の記念事業。
2	2000/6/24～25	県立少年自然の家	66	実行委員会形式での実施に移行。
3	2001/6/23～24	県立少年自然の家	73	子どもの話し合い活動休止。とにかく集まって楽しい会に。夜大雨。
4	2002/5/25～26	稲穂久喜林間学舎	52	50人限定。スパイスから作った伊藤シェフ秘伝？の手作りカレーが激ウマ！
5	2003/5/24～25	県立少年自然の家	67	早朝登山が定番化？子どもたちの話し合い活動に本腰が入る。
6	2004/5/29～30	県立少年自然の家	84	親グループのKJ法、子どもグループの作文など、結構ハードな二日間。

(宇野2005, p.80)

第3回の「備考」の欄に「子どもの話し合い活動休止」とあるように、第3回と第4回では吃音についての話し合い活動が行われていない。話し合いが行われた第1回目では、子どもの側から「こんな話し合いは二度としたくない」という否定的な声や、「ここならどもりについて話せた」という賛同的な声の二つがあった。しかし第2回目では、「ぜんぜん話し合いにならなかった」と宇野は当時の様子を振り返っている。おそらく、吃音をもつ子どもとかかわることの難しさにスタッフが直面したのだろう。第3回と第4回では「話し合いを放棄」して、「楽しい思っただけして帰ってほしい」という目的のもとにフォーラムが行われたと宇野は述べる。

しかし、2002年の夏に滋賀県で行われた、日本吃音臨床研究会が主催している「吃音親子サマーキャンプ」に参加した宇野は、吃音について語る小学校4年生の子どもたちと接したことで、再度、島根のフォーラムでも話し合いに挑戦してみようと考えようになったという。吃音についての話し合いを第5回目から再スタートし、第7回目である今回のフォーラムでも、意欲的に「吃音についての話し合い」に取り組んでいる。

子どもであれ、大人であれ、吃音について話し合うことは難しい。吃音者の多くは、吃音の存在を受け入れることができず、内面の奥深くに吃音を封印している。吃音を話題にすることは、吃音をもつ者の内面に踏み込むことを意味する。内面に踏み込むことは、相

手を傷つけてしまうことと紙一重である。その困難な問題と向き合い、一人ひとりのスタッフも迷い、絶えず自問自答しながらも活動を続けているのが、このフォーラムの特徴でもある。

### 3. 6年生4人との話し合い

#### 3.1 宇野とゆうたについて

では、実際にどのような話し合いが行われたのだろうか。6年生4人との話し合いに入る前に、宇野正一とゆうた（仮名）について簡単に触れておきたい。

##### 3.1.1 宇野正一

大きな声で島根弁を気持ちよく話す。宇野自身は吃音者ではない。6年生チームのひとは、宇野を「トマトみたい」と例えて場を笑わせていた。「なぜ吃音とかかわるのか」「なぜ吃音とかかわり続けているのか」という私の問いに対し、宇野は「吃音の子どもが好きだから」「吃音者の方と話すすと学ぶことが多いから」といねいに答えてくれた。フォーラムの進行のほとんどを宇野がすすめている。「フォーラムの参加者がおれと伊藤伸二だけになったらやめるよ。でも、ひとりでも参加者がいる以上は続けるよ。」と教えてくれたことが印象的である。

##### 3.1.2 ゆうた（仮名）

作文が書けず、最後には泣いてしまった背のちいさな男の子である。作文の時間でのゆうたは、50分間何

も書かず、あたりをキョロキョロしていた。他の3人が書き終えて部屋を出たあと、ゆうたはポロポロと泣きだしてしまった。宇野や他のスタッフがゆうたの横に座り、一緒に参加した出来事について問いかけた。そのあと、ゆうたは一人で書くようになった。

二日目の昼の山登りのとき、私はゆうたを知る女の先生から話しかけられた。その先生は6年生チームに話し合いに私が参加していることを確認したあと、「ゆうたの様子はどうでしたか？あのこは、どうしても表面的に受け答えしてしまうところがあるから、何も話さなかったんじゃないかと思って…」と、ゆうたの傾向を的確に見抜いていた。ゆうたは、学校でも表面的な話で終わらせようとする傾向があったようである。

### 3.2 話し合いの内容

宇野とゆうたとのやりとりも含め、ここでは、話し合いの様子を詳しく見てみたい。私も随時話し合いに加わっている。ゆうたを含め、6年生4人は仮名である。私と宇野の他には、大人のスタッフが4人いた。

**宇野**： スタタリングってなに？どもるってどういうこと？

まさと： 自分でも、どう言ってもいいかわからん。お母さんが言うには、原因がわからん。自分の言にくいことが緊張して言えなくなる。つ、つつつまるとか。吃音の英語バージョンね。

**宇野**： どもる、つかかか、ていうけど、この会では、「どもり」っていうわけだ。ふしぎだな〜とか、よくわからんな〜ていうことはない？

まさと： わかんない。保育所に入ったぐらいからなった。みんなが助けてくれるから、みんなちゃんと待ってくれるし、待つてあげろよ、みたいに言うてくれる。

**宇野**： 学校では、みんなどうなのかな？

しんべい： 学校では、あんまりどもらん。…いや〜、あの〜、学校でもどもることはある。…忘れた。

**宇野**： まさとが言ったみたいに、まわりが助けてくれるとか。ちきしょう！とかない？

ひろゆき： あ…、いえ…、ありませんけど。

**宇野**： そういえば、まさとがみんなの前で吃音のことについて話したって言うてたよね？それを言うてみてよ。

まさと： 忘れたし。

**宇野**： 今ならどういうことを言う？「早く言えよ」と言われたら、どう言う？みんなに伝えるとしたら、どんなことを伝えたい？どんなことをわかってほしい？

まさと： 何言ったんだろう…。思い出せん。2年ぐらいだったはず。2年生ぐらいまでは、まだつまってなかったはず。一

番言いくかったのはア行だったから。発表のときにア行がいっぱい入ってたからつまった。

**宇野**： ひろちゃんは？

ひろゆき： か…、んがえて、い…ません。

**宇野**： しんべいはどうだった？ちきしょうっていうのはなかった？

しんべい： …ちよっと思ってる。

**宇野**： ゆうたは？

ゆうた： 知らんし。どうでもいいし。

(ここで30秒ぐらいの沈黙。宇野は、なかなか吃音について話そうとしない4人の態度に困っている。ここで私も会話に入る。)

原田： ぼくも、みんなと同じどもりなんだけど。今でもね。ぼくが小学生のときは山下清のものまねをされて、嫌だったけどね。みんな山下清って知ってる？「おおおおおおにぎりが、好きなんだな」って言った人なんだけど。…さすがに知らないか。みんなもそういう経験ない？

まさと： ない。 しんべい： ある。 ひろゆき： ある。

ゆうた： …(無言)

**宇野**： どうしたら言うてくるやつをやめさせられるのかな？

まさと： たぶん吃音の人にとって、中学校が一番きついと思う。

**宇野**： 本読み、発表、友だち、家族、…どもりがどうなればいいなあ、と思ってる？

まさと： …治らん？どもりって？いつ治らん？治った人がいるの？原因はなに？…もう一つあった。吃音はちっちゃいときになるの？大きくなったら治るの？

**宇野**： そうよ。そこがポイントよ。最終的にどうしたいか。

しんべい： なんてつまるか？

ひろゆき： ない…。

しんべい： 治らんじゃない？

**宇野**： なるほど(笑)。なんか理由はある？

しんべい： まだ考えてない。

ゆうた： 治る人と治らない人がいると思う。どっかでそんな話を聞いたことがある。

**宇野**： 伊藤伸二先生はさあ〜、けっこう歳だけどさあ〜(4人が笑う)、治ってないよね？

まさと： 自分でもわかんないってことじゃないの？

**宇野**： 治るって、どういうことよ。

まさと： つまらずにスラスラ言えること。…べつに治らんでもいいけど

**宇野**： 今まさとが「治らんでもいい」って言ったけど。他のみんなはどう？

ゆうた： べつにどうでもいい。もういいわ。

しんべい： おれは治ってほしい。

ひろゆき： なくなつてほしい。

**宇野**： なんてなくなっほしいの？

しんべい： …わからん。

**宇野**： しんちゃんは治ってほしいって言ってるけど。どう？

まさと： あ… (何か言おうとして)、べつに言うことない

ゆうた： どうでもいい。

**宇野**： いや「どうでもいい」じゃなくって、僕はあなたのことばが聞きたいの！

(宇野は笑顔を保ち、場の雰囲気壊すことがないように配慮しながら、ここで少しだけ強めに問い詰める姿勢になる。ゆうたはこれまでのすべての回答を、「どうでもいい」か「そうそう」だけで答えてきた。ゆうたの答え方には、私も気になっていた。さらに宇野はゆうたに問いつめる)

**宇野**： 治ってほしいってこと？

ゆうた： そうそう。

**宇野**： いや「そうそう」じゃなくって！あなたのことばを言ってほしいの！ (宇野の繰り返しの言い方に、ゆうたも含め、他の3人もくすくす笑っている)

(ここで私が入る。4人の本音を聞きかかった私は、小学校時代の思いを述べた)

原田： ぼくは小学校のときは、治りたいって思ってたな。さっきも言ったけど、みんながマネしてくるし。なんで自分だけ話せないんだ？って思ってたし。かっこわるいって思ってたし。

**宇野**： (宇野はまさとの方に顔を向け)「そのまま(注=引用者、どもりのまま)でいい」って言い切ってくれたのはどうして？  
まさとくん、なんでそこまではっきりと言えた？

まさと： 今はなんにもつらくはないし。どもっていても、何でも同じようにみえるから、いい。

**宇野**： しんちゃんやひろちゃんは、そうは思えない？

しんべい： う～ん。ひろゆき： …(無言)

**宇野**： 原田少年が小学校のときは「かっこわるいと思ってた」と言ってるけど、どう？

しんべい： かっこわるいんじゃない？ひろゆき： かっこわるくはないと思う。

まさと： ぼくは普通だと思う。ゆうた： かっこわるいと思う。

(ここで30秒ぐらい沈黙が続く。このタイミングで私は、吃音の研究分野で知られている事実について4人に知らせようと考えた。まさとの「治らん？どもりって？いつ治らん？治った人がいるの？原因はなに？吃音はちっちゃいときになるの？大きくなったら治るの？」という問いに対して、まだ誰も答えていなかったからである。)

原田： …実は、世界中の頭のいい研究者が集まって吃音について調べただけだ。(4人の視線は原田に向いている)吃音は、治すことができないんだって。吃音の原因も不明。ちっちゃ

い子どもは治る可能性があるけど、それも50%ぐらいなんだって。小学校低学年以降でも吃音をもってる場合は、ほとんどの確率で治らない。…みんなはもう6年生だから…、残念だけど、吃音を治すことを期待するよりも、吃音とどうつき合っていくかを考えたほうがいいと思う。…どうかな？

しんべい： (かなり落胆した様子。顔は笑っているが、座っていた状態から寝転がってしまった)

まさと： (「それは知っていた」という顔。特に動じる様子はない)  
ひろゆき・ゆうた： (特に様子に変化はみられない)

**宇野**： …どもりについて、家の人と話したことある？

まさと： ある。しんべい： ある。ゆうた： ない。まったくない。ひろゆき： ない。

(再び沈黙が20秒ぐらい続く。寝転がったしんべいは、まだ落胆している様子)

原田： …吃音には、本当に困ることが多いけど。困ることばかりなんだけど。まず、みんなには、吃音に対して「かっこわるい」という気持ちをなくしてほしい。僕もね。実はまだ、なかなかできていないのだけど。がんばってるとこ。

まさと： 逆に「かっこいい」と思ってる人もいるんじゃない？(他の3人を含め、皆笑う。私も笑う。他の3人は「さすがにそれはないだろ」という顔をしながら笑っている。少し暗くなりかけていた場の雰囲気が、まさとのことばで明るくなった)

**宇野**： (時計を見る)…さあ、1時間ほど「どもり」っていうことを話してきて、今どんな気分にいる？どんな思いにいる？

まさと： ふつう。いろいろ吃音についてわかったし、みんなのこともわかったし、よかったです。

しんべい： あれは(引用者=注、おそらくは「吃音は治らない」という私のことば)ショックだった。いろいろわかって、すっきりした。

ゆうた： いろんなことがわかった。

ひろゆき： い…ばい、き…、けて、よかったです。

(宇野は終わりを告げ、子どもたちは体育館に遊びにいった。私も体育館に移動して、子どもたちと一緒にバスケをした。)

### 3.3 話し合い全体の考察

宇野は吃音の知識をふりかざすようなことはせずに、子どもたち一人ひとりの言動や身振りに合わせて、一瞬一瞬、ことばを模索していた。第三者的な言動や身振りをとらず、タイミングをはかりながらも子どもたちに問いかけようとする姿勢や態度に、私は宇野から人としての誠実さを感じた。「子どもたちの内面に踏み込むことの責任」を引き受けているように感じたからである。

特にそのように私が感じたのは、「そうそう」「どうでもいいし」という応答を繰り返すゆうたに対して、

「私はあなたのことが聞きたいの！」と若干強めに言った場面である。「吃音者でない宇野が、なぜフォーラムに続けて参加しているのだろうか？」「宇野の信念は、一体どこにあるのだろうか？」と、フォーラムに参加しながら考えていた私であるが、「あなたのことが聞きたい」という発言の中に宇野を支えている信念を見つけることができた。宇野は、相手が吃音をもつかどうかに関係なく、一人の人間として「あなたのことば（「私」のことば）」を求めていたのである。

しかし、現実には厳しい。4人は吃音について話せないし、話さない。吃音は彼らの深い悩みとして位置づいていた。話し合いの後の宇野は、ひどく落ち込んでいた。「今回は久しぶりに（引用者＝注、去年の宇野はフォーラム全体を指揮していたため、子どもたちの話し合いに参加していない）子どもたちと話せるぞ！と思って6年生を担当したけど…、へこんだわ～」と語っていた。想像していたような話し合いができなかったのだろう。話し合いの最中でも、吃音について話そうとしない子どもたちを前にして、宇野が困り果てる場面が何度かあった。子どもたちに迫る宇野もまた、吃音の話し合いを通して傷ついていたのである。非吃音者である宇野が吃音者とかかわることで傷つくことは、「痛み」という現象について考えるうえで、とても大切なことを示唆している（このことは後の「痛み」についての考察でふれる）。

6年生の話し合いに参加した大人6人のなかで、吃音をもつのは私だけであった。私が小学校のときのことについて話すと、子どもたち4人はものすごく食いついてきた。小学校時代、私には身近な吃音者がいなかったため、誰にも吃音について相談することはできなかった。彼らが非吃音者である宇野より、吃音者である私に食いつくのも納得のいくことではある。

私に限らず、「吃音をもつ者」が子どもたちの話し合いに加わることは不可欠であることが判明した。しかし同時に、だからこそ、「吃音をもっていない者」の存在が必要であることにも強く気づかされた。6年生4人は、「吃音をもっている者と吃音について話す」という経験と同じくらい、「吃音をもっていない者と吃音について話す」という経験をしてきていない。親や家族にすら、吃音について話すことは避けてきている。「吃音をもっていない者」と吃音について話すことは、フォーラムを終えてからの実生活を生き抜くためにも大切なことである。吃音をもたない宇野が彼らに問いかけることには、大切な意味があったのである。

#### 4. 第7回島根スタタリングフォーラムの総括

- ①楽しさとふれあいを求めたレクリエーション → ②吃音についての話し合い活動 → ③体育館で運動 → ④ナイトハイキング → ⑤早朝ハイキング → ⑥吃音についての話し合い活動 → ⑦体育館で運動 → ⑧吃音についての作文 → ⑨遊びを含めたハイキング → ⑩終わりのあいさつ

上の流れを見てもわかるように、第7回島根スタタリングフォーラムでは、「遊び」、「ゲーム」、「運動」を重視している。一見、吃音とは関係のないことばかりをしているようにもみえるものの、実際はそうではない。「遊び」や「ゲーム」や「運動」において話されている子どもたちのことばは、他ならぬ「吃音のことば」だからである。子どもたちははじめ、フォーラムの様子を遠くから窺っていた。が、途中から吃音であることを気にすることなく、楽しくどもりながら話しはじめた。私もまた吃音者として、吃音であることを気にせずにフォーラムを楽しんでいた者のひとりであった。

第7回島根スタタリングフォーラムの注目すべき点は何か。フォーラム全体を、ひとつの大きな学習の場として捉えてみると、次のようなことがわかる。フォーラムで注目すべきは、大きく二点ある。それは、①「肩の力を抜いて場を楽しむこと」と②「私」の内面に踏み込むこと」であり、さらにその二つの目標の視点が、スパイラルに組み合わされている点にある。

①「肩の力を抜いて場を楽しむこと」とは、現在の日常生活の様々な場で見せている「私」の「キャラ」をいったん忘れて、肩の力を抜いて、目の前にある場を楽しむことである。そして、肩の力を抜いたその状態で、ことばを発していくことである。フォーラムにおける彼らは、普段のようにことばをすぐに言い換えるのではなく、どもりのままで話すことができていた。身振りや言動が制限された普段の「キャラ」ではなく、様々な「私」の「キャラ」を試すように表現していた。場を楽しむこと。それは、あくまで同じ吃音者という条件の中で生まれた子どもたちのやりとりではある。しかし、その姿が日常生活に波及する可能性も秘めていることは見逃せないだろう。

②「私」の内面に踏み込むこと」とは、「私」の「生きづらさ」や「生き苦しさ」について、より深く考えることである。宇野によるゆうたへの問いかけは、確かに、ゆうたを泣かせることに至ったひとつの原因で

はある(ゆうたは作文の時間に書けずに泣いている)。しかし、スタッフの多くは、子どもたちに吃音について語りかけることのリスクを、「自己欺瞞にはならないぎりぎりのところ」で引き受けようとしていたように私にはみえた。表面的なやりとりだけでフォーラムを済ませようとするのではなく、内面に踏み込むことには大きな意味があるということ、子どもたち自身が気づくことができるようにスタッフは接していた。

また、②「私」に踏み込むことは、必ずしも「暗く」て「まじめ」な活動ではない。吃音の話し合いをしている最中であれ、子どもたちやスタッフのあいだでは、何度か笑いが起こっていた。①「肩の力を抜いて場を楽しむこと」は、吃音の話し合いの瞬間も、随時平行して行われていたのである。反対に、「遊び」や「ゲーム」や「運動」を目的としたナイトハイキングや早朝ハイキングの帰り途中にも、吃音についての深刻な話を子どもの側からしてくることもあった。

①と②の視点は、かかわりの場面のすべてに組み込まれており、どちらか一方で事が足りる問題ではない。①の活動に比重をかける場合であれ、②の活動に比重をかける場合であれ、スパイラルに組み合わせる必要があることがわかる。このことは、あらゆる学習の場に共通して言えることでもあるのだろう。

## 5. 「痛み」を感じているのは誰なのか？

「痛み」を感じているのは誰なのか？単純に考えれば、それは吃音をもつ子どもたちであり、同じく吃音をもつ大人であると言える。しかし、参加者の中で「痛み」を感じている者はそれだけではない。吃音の子どもをもつ親も「痛み」を感じている。また、非吃音者であるスタッフもまた、吃音に苦しむ子どもたちの姿に「痛み」を感じているのである。

問いかける宇野、問いかけられるゆうた、その場に居合わず私。「痛み」の内実は、人・時間・場など、様々な条件によって異なる。そのため、一概に「痛み」を規定することはできない。「痛み」は、「私」と「あなた」との関係性の数だけ存在するのである。

そのことを前提とした上で、私は「痛み」についての、より深い理解をめざしたい。その理解は、現代の学習者に見合うすべての学習活動を構想するうえで、示唆を得るはずである。特に、「非吃音者」である宇野が「吃音者」であるゆうたから「痛み」を受けながらも問いかけようとする姿は、他者の「痛み」に対する私たち一人ひとりの姿勢や態度について深く考えさ

せられるはずである。

下河辺(1997)は、ハンナ・アレントの「コンパッション」についての論考において、ルソーが「人間不平等論」の中で紹介しているエピソードを挙げて次のように述べている。

ここには三つの苦しみと一つの暴力がある。引きちぎられる子供の死にいたる苦痛。我が子を獣に食いちぎられるのを見ている母親の悲嘆に満ちた苦痛。そして、それを目撃していながら何も手出しが出来ずにいる囚人の苦痛。この中で、コンパッションの原型とされているのは三番目にあげた囚人の苦痛である。

(下河辺 1997, p.202)

「当事者として同じ出来事を体験していない者が、耐えがたいような出来事を体験した他者のその苦痛に「共感」するとは、どういうことなのだろうか (p.226)」という問いを提示して慰安婦の問題について論じる岡(2000)は、上の下河辺の論を引用して次のように述べる。

「慰安婦」問題をこのアナロジーで考えてみるなら、日本軍によって性奴隷とされた女性たちは、野獣に食いちぎられている子どもでもあることはすぐに分かる。では、この場合、彼女たちが味わったその苦しみに対し、自他未分離の苦痛を味わっている「母親」とは誰のことか。「慰安婦」にされた女性たちの母親だろうか。彼女たちの身内だろうか。朝鮮の女性たちだろうか。おそらく、そうではないだろう。彼女たちもまた「他者」であるかぎり、出来事に対してなにごともしえないという点で、実は「囚人」なのではないか。「母親」の位置にあるのは、今、性奴隷とされた自らの苦しみについて証言する元「慰安婦」の女性たち自身である。母親が野獣に食いちぎられる子どもの目撃証人 witness であるように、証言する元「慰安婦」の女性たちは、野獣に引き裂かれる自分自身の苦しみの目撃証人なのである。

(岡 2000, pp.228-229)

「およそ「共感」というものが、「他者」のあいだに生起する感情のことであるなら、「共感」を語るかぎり私たちはみな、この囚人であるにちがいない (p.228)」と述べる岡は、「私の眼前に突きつけられた他者の苦痛に対する同一化による「共感」ではない、

それとは異なった「共感」のことばを探すこと(p.230)の必要性を主張し、「私自身の徹底的な非力さにおいて語られなければならない(p.230)」と結んでいる。

上の引用から、私たちは「子ども」「母親」「囚人」という三つの「痛み」のありかたを学ぶことができる。岡の区分けでは、「母親」と「囚人」との違いは「〇〇の経験者」であるかどうかにある。

本稿では、岡の議論をさらに発展させ、「教師」「友だち」「恋人」「身内」というコードを「母親」に付け加えたい。岡は「身内」であるリアルな母親も「出来事に対してなにごともしえないという点で、実は「囚人」であると述べている。だが、岡のように「身内」の母親と、未だ名前すら知らない者を、同じ「囚人」に位置づけてしまうのは、「母親」という定義の重要性を不必要に狭めてしまう。「自他未分離の苦痛を味わって」しまうのは、同じ「〇〇の経験者」だけでなく(何をもち「同じ」経験者であると規定するのはそれ自体大きな問題が残るが)、その者との「関係性が深い者たち」も味わうはずである。「教師」「友だち」「恋人」「身内」のすべての者が「自他未分離の苦痛」を味わうことはないにせよ、「母親」の定義には付け加えるべきである。

以下、本稿では下河辺と岡の論を援用して、独自に「子ども」「母親」「囚人」のそれぞれの「痛み」の定義を試みた。

#### <「子ども」の定義>

現在「〇〇者」もしくは「過去に〇〇を経験した者」である「私」(a)が、「あなた」(b)の「〇〇」にまつわる言動や身振りから受けとる痛み

(注、〇〇には同じことばがあてはまる)

ex. フォーラムでの私(a)とことばの教室の教員である本田(b)とのやりとりが当てはまる。本田(仮名)は、夜の打ち上げのときに、吃音についての自説を私に対して次のように展開した。「吃音は、まず受容することが大事ね！受容しなければ、治るなんてことはぜったいにないんだから！受容よ。受容！」

意気揚々と語る彼女の前に、私はただ沈黙を保つことしかできなかった。非吃音者である彼女が、吃音者である私に「受容」と「治療」ということばを流暢に使えてしまえる、その配慮のない言動や身振りに対して、私は吃音をもつことの強い「痛み」を感じた。おそらく彼女は、吃音をもつ親にも同じように語っているはずである。「治療」ということばは、

本人の善意から生まれているためだけに扱いが難しい。しかし「治療」することが限りなく難しい吃音において、「治療」ということばを吃音者に投げかけ続ける以上、「下にいる吃音者を上にいる健常者に少しでも近づける」という構図から抜け出すことはできない。「治療」ということばを安易に用いるのではなく、私たちは、吃音という現象に対して、べつの「ことば」を模索しなければならない。

#### <「母親」の定義>

現在「〇〇者」もしくは「過去に〇〇を経験した者」、加えて、「あなた」(b)の「教師」「友だち」「恋人」「身内」である「私」(a)が、現在「〇〇者」もしくは「過去に〇〇を経験した者」であることに苦しむ「あなた」(b)から受けとる痛み

(注、〇〇には同じことばがあてはまる)

ex. 私(a)と小学校6年生のしんべい(b)のやりとりが当てはまる。「吃音は治らない」「吃音の原因もわからない」という事実をしんべいに伝えた後、しんべいの悲しみの顔を見た私は、過去の私が「治らない」という事実を聞かされたときの場面としんべいとを重ねて強い「痛み」を感じた。現在吃音者であり、過去に吃音者でもある私が、同じ吃音において苦しむしんべいから感じる「痛み」は、「母親」の「痛み」に他ならない。

また、ゆうたとのやりとりにおいて落ち込み、傷ついていた「非吃音者」である宇野は、吃音という現象に対しては完全な「囚人」であるものの、おそらくは「母親」としての「痛み」も同時に立ち上がっていたのではないかと。ゆうたに問いかける宇野の姿勢からは、「教師」としての責任を果たそうとしているようにもみえたからである。

#### <「囚人」の定義>

- ① (a)の言動や身振りによって苦しむ(b)から受けとる「私」(c)の痛み
- ② (a)の言動や身振りによって(b)が苦しみ、その(b)を見て苦しむ(a)から受けとる「私」(c)の痛み
- ③ (a)の言動や身振りによって(b)が苦しみ、その(b)を見て(a)が苦しみ、(a)と(b)の2人を見て苦しむ(c)から受けとる「私」(d)の痛み
- ④ (a)の言動や身振りによって(b)が苦しみ、その(b)を見て(c)が苦しみ、(a)と(b)と(c)

…（組み合わせは無限に続く）

ex. ①は、宇野 (a) に問いかけられるゆうた (b) を見たときに私 (c) が感じた痛みである。

②は、宇野 (a) の問いかげによって、ゆうた (b) が苦しみ、そのゆうた (b) を見て、宇野 (a) が苦しむ姿を見て私 (c) が感じた痛みである。

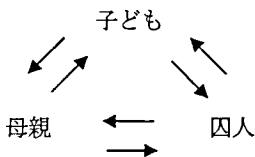
③は、吃音である息子 (a) によってアルコール中毒の父親 (b) が苦しみ、その父親 (b) をみて息子 (a) が苦しみ、息子 (a) と父親 (b) の苦しむ姿を見て苦しむ木村さん（引用者＝注、仮名。自身も吃音者でありながら、息子の吃音と父親がアルコール中毒であることをフォーラムの中で私に伝えてくれた。）(c) から感じた私 (d) の痛みである。

下河辺や岡の論からわかることは、「子ども」「母親」「囚人」であることの「痛み」は、単一に分類できるほど単純なものではないことである。「痛み」は静的なものではなく、動的で流動的なものである。「子ども」「母親」「囚人」の「痛み」が複雑に絡み合っている点に、「痛み」が「痛み」であることを示している。

「子ども」「母親」「囚人」における、どの「痛み」が中心となって立ち上がるのかは、あくまで「私」と「あなた」との関係性によって決まる。上で挙げた例は、その時その瞬間において、中心となって立ち上がった私の「痛み」を代表させたにすぎない。

「人の痛みを引き受ける」ということは、「私」と「あなた」をつなぐことばを模索すること（沈黙も含む）である。宇野がゆうたを前にしてことばを模索していたのも、ゆうたの痛みを引き受けようとするひとつのあらわれだったのだろう。宇野は、「囚人」として受けとめた「痛み」の責任を引き受けようとしていたのである。少なくとも私は、そのように考えたい。

そのことはつまり、「当事者性を引き受ける」ということになる。現在「〇〇者」もしくは「過去に〇〇を経験した者」を「当事者」として定義すると、「当事者性」とは、次のような動的で、揺れ動いている「痛み」の図であらわすことができるだろう。



「痛み」に揺れ動く「私」のことばを模索することは、「当事者性」を引き受けることである。私がこのフォー

ラムで学んだ一番のことは、「当事者性を引き受ける」という姿勢や態度である。

## 6. 「当事者」とは誰のことなのか？

—国語教育（ことばの教育）の可能性にむけて—

「ノリ」や「テンポ」や「オチ」を、会話の中に極端なまでに求める現代の子どもや若者は、「沈黙して考えること」を頑なに避けようとする。吃音者、非吃音者に関係なく、彼ら・彼女らは、自己防衛としての「キャラ」を集団の中に確立し、ダイレクトに「私」が傷つかないように配慮している。「キャラ」とは、「集団における「私」の役割」のことであるが、多くの場合、それは「私」の側が勝手に作りだしたイメージにすぎない。だが、多くの学習者は「言動や身振りを自分で意図的に選んでいる」と思い込んでいる点に、「キャラ」であることの特徴がある。

「ノリ」や「テンポ」や「オチ」をつけることを続ける彼ら・彼女らは、その会話の速さと自動化したりズムのために、極端なまでに表面的で二項対立的な思考が続く。そして、その姿勢や態度は習慣化していく。「私」の生活と関係するもの・ことには過敏・過剰な反応を示し、「私」の生活と関係がないもの・ことには、徹底して無視・無関心を決め込む。学習者の多くは、あらゆる現象に対して「当事者」という意識がない。

考察してきたように、私たちは、あらゆる現象に対して、「痛みの当事者」である。その意味では、すべての者が「当事者」である。おそらく問題は、「痛みの感じ方」にある。つまり、「痛み」を感じた瞬間に、その「痛み」ときちんと向き合おうとせずに、「ノリ」や「テンポ」や「オチ」だけで回収しようとする、その姿勢や態度に問題がある。

国語教育（ことばの教育）における「ことばの学び」の定義は、国語教育関係者の数だけ存在する。だが、それらは往々にして、過去におこなわれた現象の先に獲得した視点として扱われている。それはもちろんそうであり、間違いではないのだが、私はむしろ、「今ここでまさしく起ころうとしている現象」として「ことばの学び」を位置づけたい。「子ども」「母親」「囚人」という「痛み」の担い手である「私」と「あなた」とをつなぐ「ことば」を探ること、今この瞬間も「ことば」を見つけようと試みていること、「痛み」を「痛み」として引き受けようとする、その姿勢や態度が、すでに「ことばの学び」の核心に迫っているように思われるからである。



フォーラムで得たことは、①「肩の力を抜いて場を楽しむこと」と②「私」の内面に踏み込むこと」の二つの視点がスパイラルに組み合わされている点にあった。国語教育（ことばの教育）のどのような学習の場であれ、「遊び」「ゲーム」「運動」などの要素を取り入れながら場を楽しみ、話し合いや作文などでことばを深く模索していくことが求められる。

まずは、友だちに「私」のすべてを合わせてしまうのではなく、一人ひとりが机を離して、「私」の「痛み」について考えることから始めてみてはどうだろうか？その「痛み」を、「ことば」にすることからはじめてみてはどうだろうか？たとえば、ゆうたのように作文の途中で泣き出してしまうことがあったとしても。

過去に「子ども」「母親」「囚人」として感じてきた「私」の「痛み」と、まずは、きちんと向き合うことである。その「痛み」を、瞬間的・瞬発的に回収してしまうのではなく、「私」の中で落ち着かせようと試みることである。子どもであれ、大人であれ、島根スタタリングフォーラムに参加し続ける者たちは、「きちんと「私」にまなざしをむけること」の大切さについて、少なからず見抜いているのではないだろうか。

「私」と「あなた（私）」とをつなげることばを探るための国語教育（ことばの教育）をめざしたい。「子ども」や「母親」の「叫び（ことば）」はもちろんのこと、オリの中にいる「囚人」であっても、「声（ことば）」は誰かに届くのではないか。それが「沈黙」という「ことば」であったとしても、「痛み」を通して、その「ことば」は誰かに伝わるはずである。なによりもまず、生まれた「ことば」は「私」に届く。今まさに、無視・無関心を決め込もうとしている「私」に対して、「ことば」は立ちどまらせてくれるのである。

「当事者」とは、私たちのことなのである。私たちは、意図的・自覚的に、「痛みの当事者」にならなければならない。

## 引用参考文献

- 石川良子 (2003) 「当事者の「声」を聞くということーAさんの「ひきこもり始め」をめぐる語りからー」『年報社会学論集』、関東社会学会機関誌編集委員会編
- 伊藤伸二 (2004) 『知っていますか？ どもりと向きあう一問一答』、解放出版社

- 上村悦子 (2001) 「どう治すかより、どう生きるかをー吃音のままのあなたでいいんだー」『婦人公論』第86巻第7号、中央公論新社
- 宇野正一 (2005) 『島根スタタリングフォーラム2004ーまとめと感想文集ー』(未刊)
- 浦河べてるの家 (2005) 『べてるの家の「当事者研究」』、医学書院
- 岡真理 (2000) 『彼女の「正しい」名前とは何かー第三世界フェミニズムの思想ー』、青土社
- 小田玲子 (2004) 「慢性的児童虐待後を生きる当事者としての私」『社会運動』、社会運動研究センター準備会編
- 貴戸理恵 (2004) 『不登校は終わらないー「選択」の物語から〈当事者〉の語りへー』、新曜社
- 下河辺美和子 (1997) 「苦しんでいるのは誰なのか？ーコンパッションをめぐるリポリューションー」『現代思想』第25巻第8号、青土社
- ジャン=ジャック・ルソー (1754) 小林善彦訳 (1966) 「人間不平等起原論」平岡昇編『ルソー 世界の名著30』、中央公論社
- 五里蜜子 (2003) 「子育てと虐待ー当事者の語りからー」『女性学年報』、日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会編
- チャールズ・ヴァン・ライパー (1963) 田口恒夫訳 (1967) 『ことばの治療』、新書館
- 中西正司・上野千鶴子 (2003) 『当事者主権』、岩波書店
- 中西正司 (2004) 「当事者の時代と社会福祉ー権利意識とパターナリズムの残影ー」『社会福祉研究』第90号、財団法人鉄道弘済会社会福祉部編
- 橋本義郎 (2005) 「〈インクルージョン〉を促進する文化要素ー受け入れ、受け入れられる当事者としてのー考察ー」『ソーシャルワーク研究』Vol.30、ソーシャルワーク研究所編
- ハンナ・アレント (1963) 志水速雄訳 (1975) 『革命について』、中央公論社
- 水町俊郎・伊藤伸二編 (2005) 『治すことにこだわらない、吃音とのつき合い方』、ナカニシヤ出版
- 向谷地生良 (2005) 「当事者の力とインクルージョンー浦河べてるの家での取り組みからー」『ソーシャルワーク研究』Vol.30、ソーシャルワーク研究所編